

AMCoR

Asahikawa Medical College Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学研究フォーラム（2001）2巻2号:94-97.

翔 -本学看護学科第1期・第2期卒業生のその後-

野村紀子

依頼稿 (報告)

翔

— 本学看護学科第1期・第2期卒業生のその後 —

野村 紀子*

昨平成12年の5月から秋にかけて、看護学科棟は賑やかであった。卒業生が近況報告に訪れてくれたからである。実習の始まりにはいつも体調をくずしていたが、今や両親に恩返しのため送金しているという卒業生。勤務先からその施設の代表として、後輩の就職勧誘を任されて訪問した卒業生。夏休み休暇かどうか、休みの理由もよくわからないまま、長期休みができたからと近況報告にきてくれた卒業生。勤務先で落ち込み、何時間も車を飛ばして「やめたい」と言いに来たが、帰る時には、「私、何しにきたのかしら」と言った卒業生。

こうした彼ら第1回生は、57名と編入生4名が卒業し、61名中20名が道外の臨床の場に就職している。第2回生は59名と編入生10名が卒業し、69名中18名が道外の臨床の場である。道外就職は合計約30%を占める。ちなみに、旭川医大病院には、1回生が11名、2回生が15名であった(20%)。しかし、第3回生にならんとする卒業予定者の就職希望は40名と聞いている。旭川医大病院・看護部長も大変喜んでくださっている。少しづつ増加の傾向はあるが、旭川医大の場合、就職内定が1月になってしまうので、学生はそれを待てないようでもある。多くの卒業生が旭川医大病院に就職し、実習に出る後輩の指導にたずさわる日を看護教官一同、首を長くして待ち望んでいる。道外の病院への就職では、東京が多く、聖路加国際病院・東京慈恵会医科大学病院・虎ノ門病院・日本医科大学病院・順天堂大学病院・東京医科大学病院・国立がんセンター病院・慶応大学付属病院などであり、神奈川県では北里大学病院・昭和大学藤が丘病院・神奈川県立こども医療センター・横浜市立大学病院などが多い。このような東京・神奈川県下に就職した彼女達は、グループを作って時々会い、慰め励まし合っているとのことである。その外に、静岡県立こども病院・千葉西総合病

院・岩手医大病院・東北大学付属病院・長崎大学付属病院・信州大学病院などにも就職している。全卒業生130名中、看護婦免許証は全員が保有し、保健婦免許証は126名、助産婦免許証は8名である(平成13年10月現在)。保健婦として活動している卒業生は、第1回生で9名、2回生で8名である。17名中道外での就職は2名おり、1名は産業保健婦となり、1名は病院の中の保健婦として活躍している。他の15名は道内の市町村に就職した。例えば、奈井江町・端野町・岩見沢市・稚内市・小樽市・釧路市・渡島保健所・札幌市・旭川市などである。看護婦・保健婦免許証は126名が共に持っても、いずれかの免許証にスタンスをおいた仕事の内容となる。しかし、両方を学んだことをいずれの仕事にも生かしてほしいと思う。

助産婦として活動している人は免許取得者8名中6名である。1名は個人病院の規模ではあるが、この時代に大変分娩数の多いところで活躍している。他の5名中3名が道外である。道内の場合、施設によっては助産婦としての採用ではなく、看護婦で採用され、ローテーションで産科病棟へ行く場合もある。しかし、実際的には卒業してすぐ助産婦としての仕事をしなければ、技術も忘れてしまいあまり実践的には役に立たなくなる。また、この少産の時代に実習を終えることも大変な努力を要していることから、助産婦として仕事をしないのであれば、免許証にこだわってほしくない気がする。しかし、連帯保証人である立場の多くの方たちは、せつかく3種類の免許証が獲得できるのだから、それを全部取るようにと学生に勧めているようである。助産婦の場合は、1学生につき10例の分娩介助が条件となっている。しかし、限られた実習期間の中で複数の学生が、分娩を直接的に取り扱うことは最近、とみに不可能に近い状況がある。免許証のためだけなら助産婦の選択をして欲しくない、というのが正

* 旭川医科大学 臨床看護学講座

直な感想である。現実には、助産学実習中に挫折し中止した学生も毎年存在する。また、保健婦・助産婦・看護婦を看護職として一くりにしているが、具体的な仕事の内容には大きな違いがある。看護学をベースにして要求される知識や技術であっても、助産婦の場合には、胎児と母親の生命に直結することであり、1分1秒の世界が中心であり、医事紛争に関わることも一番多い。せつかくだからと3種類の免許証を取りたい気持ちは分からぬでもないが、安易に考えてもほしくない。

また、一度就職しながら勤務先を変更した卒業生もいる。詳細は明確ではないが、リアリティショックか対人関係の問題のようである。具体的には3名の卒業生が、そのような問題を抱えたまま就職先を変更している。退職するまでの経緯の中で看護部としては、面接を何度も繰り返したり、職場をローテーションしたり、本人のためにながりの努力をしてくださっている。しかし、その後も勤務を続けることができなかつたようである。そのような状況に陥った卒業生の一人が言うには、周囲の動きについていけないとのことであった。大病院が向いている人もいれば、小さな規模でゆったり・じっくり患者さんに向き合うことが向いている人もいる。自分の個性と合った場所で、自分らしさを失わず努力してほしいとも思う。ちなみに、一度退職した3名は、自分に合った場所を見つけ復職している。その他、1年目で結婚のため関東から北海道に勤務先を変更した人もいると聞いている。

すべての病院ではないが、各病院の看護部から情報が入る。今のところ、総じて良い評価を頂いている。しかし、卒業生が何に困難を感じ、何に悩んでいるのかを、調査する必要があるのかもしれない。多くの卒業予定者が就職先を決定するにあたり相談にくる。その時のアドバイスとして、教育背景を理解してくれる場所を勧めている。教育背景の理解とは何か。看護の教育機関は専門学校もあり短期大学もある。専門学校の教育は技術指導を中心においている。同じ技術でも、何度も回数を重ねた技術教育と1回や2回の技術の教育では、学生の自信の持ち方にも相違がでることはいなめない。今や、どこの看護部も、就職した新人に対して、その組織の紹介、勤務場所・倫理規定・事故対策や、具体的な看護実践のやり方(シーツ交換・点滴の管理・頻度の高い注射薬の紹介など)について、現場にでる前に徹底したオリエンテーション

を実施している。そのための期間として2~3週間を費やしているところもある。夜勤が始まるのも早くて3カ月後からが一般的であり、余裕のある病院では6カ月後からの場合もある。そのような状況でスタートできる場所を選択するよう勧めているが、最終的な結論は本人自身の決定でなければならないと考えている。実習先で気に入られて就職した例もあるが、原則として、教官が就職先を具体的に勧めてはいない。

この6月、会議のため上京した折り、1回生・2回生が就職しているある病院を訪ねた。1回生4名・2回生4名が就職している。うち1名は結婚のため退職したとか。7名全員に会うことはできなかったが、それぞれが忙しくかつ楽しく仕事をしていた。1回生は、その場の雰囲気にもマッチしていて、何年も前からその地にいたような感さえ受けた。2回生は、まだオリエンテーション期間であったが、昼食の時間もとれずに「要領が悪いから……」と笑っていた。直接会った限りでは、皆それぞれが生き生きしていたのを感じた。「困っていることはない？」と質問したところ、みな一様に「学生時代もっと勉強しておくんだ」と話していた。まさに「後悔先に立たず」というところらしい。その施設では、大学卒業生を中心とした採用であるが看護部の評価も高く、他校の卒業生に比較して何ら遜色もなく、逆に将来を期待している、というありがたいお言葉を頂いた。若い時代は、良い意味でも悪い意味でもその場の雰囲気などの環境に影響されるものであるが、一様に態度・言葉使いが丁寧で、かつ、てきぱきとして洗練された印象を受けた。たまたま1回生と2回生が同じセクションであった例では、2回生は1年先輩となる1回生を頼りにし、先輩もそれを受けて立っている様子が見られ、大変微笑ましい感を受けた。

本付属病院でも、卒業生に時々出会うことがある。懐かしげに声をかけてくれる。しかし、頭髪や服装が乱れているとすぐにチェックをしてしまうのは、同じ建物の中にいることで、私自身が相手を学生時代の延長線上に置いて見てしまう結果なのかも知れない。従って厳しい評価をしてしまう。もちろん、良い評価を得ている卒業生もいる。よく「一生懸命がんばっていますよ」と言われる。「何にどうがんばっているのですか？」と聞き返したことも何度かある。一生懸命もいいけれど「医療事故」だけは起こさないと教官一同祈る思いである。実習の際、各教官が卒業生の仕事

ぶりを目の前にすることも多く、不安は隠しきれない。親子の縁が切れないとか、やはりかわいい子には旅をさせるべきなのかと悩むこともある。しかし逆に、近くにいることのメリットもある。学会への発表や論文投稿の指導をするチャンスもあるからである。現在はほんの2~3例のことではあるが、このようなことこそ看護学科としての使命であると考えている。札幌にいながらも学会発表準備のために来ている卒業生もいて、やつと大学らしくなったかな?と少し満足している。このような例が数多くなることを期待している。

以上のように、卒業生の動向を見ていくと、どこでどのような仕事をしているかだけではなく、看護学科の中が見えてきた感がある。基礎教育の中で、何が不足していて、何をどのようにフィードバックさせるべきかという問いである。ぎっしり詰まった教科目・実習を展開する中で、何か欠けていたものはなかったか。年1回、文部科学省主催による「看護学教育ワークショップ」がある。この11月で3回目となる若いワークショップであるが、昨年の第2回開催時、パネルディスカッションのパネラーとして参加した。臨床からのパネラーとして参加した、ある大学病院の看護部長の主張では、採用時までには修得して欲しい看護技術は、看護学の中で一般的にいう「基礎看護技術」の項目が中心であった。それを受けて、本学科でも技術の教育の見直しを行ったことは言うまでもないが、1回生・2回生の卒業生の場合はどうであったか自信がない。卒業生の誰もが、基礎看護技術を十分に教育されなかった、という恨み言は言わなかったが、それで安心して良い問題ではないようにも思う。なぜなら、基礎看護技術に自信を持っているかどうかは臨床での第一歩となるからである。自信をつけて卒業させるには看護技術教育の徹底が大切である。

第二に、学年ごとの到達レベルを各学生に意識させつつ教育をすることの必要性を感じる。卒業時の到達レベルについては、「学生生活のしおり」に記載されている。しかし、対人関係に悩み退職に追い込まれたり、チーム医療の中でメンバーとしての力量を発揮できなかったりするの、到達レベルには達していないからとも言える。また、「学生時代にもっと勉強しておくべきだった」ことは、誰もが自分のこととして実感することではあるが、各学年の到達レベルを明示している以上、在学中にもっと意識させなければならな

いのではないか。そうすることで、学生自身が具体的な目標を意識し、何となく学生生活を送ることを危惧するようになるかも知れない。

第三として、教官としての態度・姿勢の問題がある。若い時代は何かと周辺の影響を受けやすい。学生と教官の関係には相互作用が働く。就職した先での影響の受け方をみていると、学生時代を外して考えることはできない。教官一人ひとりの姿勢や態度が、学生に何らかの影響を与えていることを意識するべきであろう。真似てよい教官からは学び、悪い教官からは反面教師としての学びを期待したいところだが……。看護界での一般的な言葉に「患者から学ぶ看護」というものがある。看護の実践の場では、自律し責任を持たなければならない。そのために権限も必要となる。卒業生が仕事の責務を果たすことを就職した時点で要求されるのである。各教官が自律し責任を持った仕事をしていないのなら、卒業生だけにそれを望むのは可哀想すぎる。自分は権限ばかり振り回していないか?自分は自律した教官か?教官としての責任を果たしているか?今一度反省すべき時がきた。まさに「学生から学ぶ教育」と命名したい。個人による勝手な解釈ではなく『広辞苑』にある「プライド」を持って教育に当たりたいものだと考える。プライドのない教官のもとではプライドを持った学生は育たない。看護に対する情熱のない教官に教育されても看護観が育たないように……。

130名の卒業生のことを考えながら、つい胸の内を率直に吐き出してしまった。

資料 1 複数の卒業生が就職した場所

—就職者126名の内訳—

道内 88名 (70%)	① 旭川医大付属病院26名(20.1%) ② 札幌医大付属病院 9名(7.1%) ③ 旭川厚生病院 5名(4%) 北大付属病院 5名(4%) ④ 旭川赤十字病院 4名(3.1%)
道外 38名 (30%)	① 北里大学病院 8名(6.3%) ② 横浜市立大付属病院 4名(3.1%) ③ 神奈川県立こども医療センター 2名(1.6%)

(全卒業生130名中不明者1名・進学者2名・
結婚1名を除外した126名を対象としている)

(平成13年10月現在)

資料 2 免許証の所有状況と使用状況

—全卒業生130名の内訳—

免許証の種類と所有者数	免許証による就職状況
看護婦免許証のみ 3名(2.3%)	就職2名・不明1名
看護婦・保健婦 免許証 119名(91.5%)	保健婦で就職17名・看護婦で就職99名・ 看護系大学院以外の進学2名・結婚1名
看護婦・保健婦 助産婦免許証 7名(5.4%)	助産婦で就職5名・看護婦で就職2名
看護婦・助産婦 免許証 7名(0.8%)	助産婦で就職1名

(平成13年10月現在)